

秋の映像

——キーツの『秋に寄せて』(一)——

永井豊実

序

Keats が Reynolds に宛てて書いた手紙 (1819年9月21日付) 中の言葉は誰でも引用せずにはおけない程、『秋に寄せる』賦と切り離せない言葉となっている。詩の前書きのようにして読んで見ると

「何と美しい季節だろう、今は。空気もまた何と素晴らしいことか。あたりは心地よい程ぴりりとしている。いや実際、冗談ではなく、純潔な天気——ダイアナの空だ。僕は今これ程迄刈株畑を好きになったことはない。ああ、春の肌寒い緑の野よりもずっと素晴らしい。それにどことなく刈株畑が暖かく見える。丁度ある絵が暖かく見えると同じように。日曜日の散歩の際にあまりにも僕の心を打ったので詩を作りあげたのさ¹⁾。」

キーツは秋の大気の爽やかさと、刈株畑のどことなく暖かさに感銘を受けて、一気に秋の特性を想い描いて書きあげたように思われる。その情景を追ってみると、第Ⅰ連^{スタンザ}では霧の舞う午前の田舎屋の辺りで、成熟した果実が豊かに実っている風景であり、第Ⅱ連^{スタンザ}では秋日和の昼の頃で、刈り入れも終りに近づいた田園で、収穫の状態を見る情景であり、第Ⅲ連^{スタンザ}では夕焼雲が華やかに映えて、刈株畑をバラ色に染める田園の夕景色の中に、秋の調べである虫や鳥や羊の鳴き声が聞えてくる情景である。秋は果実の成熟している風景に、収穫の風景に、生き物の鳴き声の中にあり、その一つ一つに目を向け、耳を傾けることによって秋を見い出していくのがこの詩の味い方であろう。手にした研究書の中で Ian Jack 氏²⁾の絵によって第Ⅱ連の四つの情景に具体的なイメージのヒントが与えられた。また小川和夫教授のキーツの「オード鑑賞と分析」³⁾の中の『To Autumn』の秀れた分析研究に教えられるところ全てであった。従って十分言い尽されてしまった感の中で、今更落ち穂拾いをするのも徒勞と覚えつつも、キーツの「秋に寄せて」のオードに牽かれて、秋の映像群を私なりに理解する為に字句解釈から始めて、味の第一歩としたい。

TO AUTUMN

I

SAESON of mists and mellow fruitfulness,
 Close bosom-friend of the maturing sun;
 Conspiring with him how to load and bless
 With fruit the vines that round the thatch-eves run;
 To bend with apples the moss'd cottage-trees, 5
 And fill all fruit with ripeness to the core;
 To swell the gourd, and plump the hazel shells
 With a sweet kernel; to set budding more,
 And still more, later flowers for the bees,
 Until they think warm days will never cease, 10
 For Summer has o'er-brimm'd their clammy cells.

II

Who hath not seen thee oft amid thy store?
 Sometimes whoever seeks abroad may find
 Thee sitting careless on a granary floor,
 Thy hair soft-lifted by the winnowing wind;
 Or on a half-reap'd furrow sound asleep, 5
 Drows'd with the fume of poppies, while thy hook
 Spares the next swath and all its twined flowers:
 And sometimes like a gleaner thou dost keep
 Steady thy laden head across a brook;
 Or by a cyder-press, with patient look, 10
 Thou watchest the last ooziings hours by hours.

III

Where are the songs of Spring? Ay, where are they?
 Think not of them, thou hast thy music too, —
 While barred clouds bloom the soft-dying day,
 And touch the stubble-plains with rosy hue;
 Then in a wailful choir the small gnats mourn 5
 Among the river sallows, borne aloft
 Or sinking as the light wind lives or dies;
 And full-grown lambs loud bleat from hilly bourn;
 Hedge-crickets sing; and now with treble soft
 The red-breast whistles from a garden-croft; 10
 And gathering swallows twitter in the skies.

秋に寄せて

I

霧と甘く熟れた果実の季節

成熟もたらず太陽の 親ちかしい心の友達よ。

太陽と示し合わせて如何にして 重く荷をつけ祝福しようか図っている

わら葺き屋根の軒端を廻るぶどうの蔓に ぶどうの房を。

田舎屋の苔むす木々に 枝もたわわにりんごをならせ

ありとあらゆる果実をば 芯まですっかり熟れさせる。

ひょうたんふっくら脹らませ、はしばみ殻も丸々と

甘い仁で太らせる。更にもっと蕾をつけて、

また更にもっとつけ 遅咲き花を蜜蜂に

蜜蜂達は思うだろう 暖かい日々は終らぬと

夏は粘つく蜜房をたっぷり溢れさせたから。

II

お前を見ぬ者誰いよう しばしばお前の穀倉に。

時々求めて野に行けば お前の姿を見つけ出す

穀物倉の床の上 のんびり坐っているお前、

お前の髪を柔らかに 穀殻吹き分く風にのせ。

或いは半ば刈られた畝の上 ぐっすり眠っているお前、

けしの香りにまどろみて、お前の鎌が

刈り残す蔓の花々絡まった 次の畝刈る一時を。

そして時々落ち穂拾いの人ごとく お前は

荷を載す頭をばしっかりと保たせ小川を渡る。

或いはりんご絞りの臼のそば、辛棒強い面持で、

幾時間ともなく滲み出る最後の最後の雫をば、お前はじっと見つめている。

III

いづくにありや春の歌、ああ、いまいずこ。

思うまじ春の歌、秋には秋の調べあり――。

縞の雲映え花咲かす 静かに沈む秋の日を、

刈株畑もばら色に彩り染めるしばし時、

物悲しげに聖歌隊なして蚊柱嘆き泣く

川端柳生ふる間を 時には高く運ばれつ

時には低く沈み落つ、軽風吹くまま小止むまま。

はや生い立ちし仔羊は 丘辺の方で高啼きぬ。

垣根のこおろぎつずれ鳴き、今また駒鳥柔らかに

高音の口笛吹き鳴らす 庭の畑の辺から。

空には燕群れ集い 声高らかに囀り渡る。

(試訳⁴⁾)

I

先ず第 I 連の情景を追って調べてみることにする。

SEASON of mists and mellow fruitfulness, (I, l. 1)

霧と甘く熟れた果実の季節

とキーツの得意とする簡潔で十分に含みのある言葉でもって秋を言い表わしている。霧 mists は秋の特性を表わすものとして象徴している。朝方あたりに立ち込めている様子を示し、その霧もやの中から甘く豊かに熟れた果実が農家の庭先になっているのが見えてくる。今、秋の季節に呼びかけているように見えながら、じっと静かに眼前の景色を眺めている内にしみじみと秋の豊かさが身に沁みて、つい口に出てきたような感じのする口調である。霧について Robin Mayhead 氏⁵⁾は

Since the overall impression made by the opening stanza is that of a steady, radiant warmth, the word 'mists' does not immediately suggest anything to the contrary. To one who knows the season of autumn in Europe, 'mists' will recall most obviously the haze experienced on a mellow day of sunshine, or the mist with which a warm autumn day may begin. But the very word 'mists' has among its associations a suggestion of chill, which hints, if only distantly, at the cold days of the coming winter, and death.

For the time being, however, all is richness and fruition.⁴⁾

始めのスタンザから受ける全体的な印象は、静止した陽の暖さを覚えるので、「霧」という言葉はそれと反対のことを直接には示していない。ヨーロッパの秋を知っている者にとっては、「霧」が明らかに呼び起すものは秋日和に経験するもやとか、暖かい秋が始まる時の霧である。しかし「霧」という正にその言葉の中に冷やかさを思わせる連想があり、遠くにはあるが、来るべき冬の寒さと死を暗示している。しかし当座のところは全てが豊かさと実りである。

と言っている。まだ mists の中に冷やかさを覚えるかどうかは別としても、日毎に霧があたりに立ち込めて果実を柔らかく包み、朝の秋冷によって果実の甘みが増していくことは確かであ

る。そして昼の陽の暖かさによって増々熟していくのである。韻律的にも <m>の頭韻によって、mists and mellow fruitfulness が語群として凝集し「霧のなかで果実が甘く熟れ、その甘く熟れた果実を霧が包むという含蓄を持っている⁶⁾」> と小川和夫教授は分析されている。(< > は引用文を要約した個所又は引用語, 「 」は原文を引用した個所, 以下同じ。)

従って秋霧と成熟をもたらす太陽 the maturing sun によって mellow fruitfulness 「甘く熟れた実り」がもたらされるのであって、秋は fruitfulness 「実り, 豊穡」でここでは果実にその特性を持っていることになる。1年半程前の1818年3月13日の手紙で書いた Sonnet の *Four Seasons* 『四季』にも秋の象徴としての霧が出てくる⁸⁾。

: quiet coves

His soul has in its Autumn, when his wings

He furleth close; contented so to look

On mists in idleness—to let fair things

Pass by unheeded as a threshold brook. (ll. 8-12)

人の心は秋の内に静かな入江を持っている,

翼を閉じている時に。心満ち足りて

無為の内に霧を眺めている, 美しいものを

門口のそばを流れる川のように気にもとめずに流れやる。

目に見えぬ内に何か醸し出されていくのであろうが、この詩では秋の霧をこれとって考えることもなく眺めやっている。

こうした秋の特性である霧 mists と甘く熟した実り mellow fruitfulness との情景を次々と見つけ出していく。

Close bosom-friend of the maturing sun;

Conspiring with him how to load and bless (I, ll. 2-3)

において「秋が太陽と共に示し合わせていかにして重く荷をつけ祝福することができるかと図っている」ということは、成熟をもたらしてくれる太陽 the maturing sun に増々暖かく陽が照ってもらふことで、更に一層ぶどうの実を重くしてやるのが祝福をもたらすことになる。秋は何を図るかという、霧と mellow fruitfulness の特性をもっている、果実を甘く水々しく熟れさせることである。今日の前のぶどうは更にますます甘く熟れようとしていく感じがでく

る。maturing sun において、

Keats deliberately employs the word 'maturing' in an ambiguous way. In one sense, 'maturing' refers to what the sun is actually doing, since its radiance is what brings the fruits of the earth to ripeness. But at the same time the sun can itself be regarded as undergoing a maturing process.⁸⁾

キーツは巧みに 'maturing' という語を両義の意味の言い方で使っている。一つの意味は 'maturing' は実際に太陽がしている意味に使われ、その陽の光が地上の果物に成熟をもたらしてくれることである。同時に太陽自身も円熟の過程にあると見なされることである。

とメイヘッド氏は解釈している。夏の強い陽差しから柔らかな暖かい陽差しに変わってきていることも汲みとれて、11行に出てくる warm days と結びつく感じである。

With fruit the vines that round the thatch-eves run;
To bend with apples the moss'd cottage-trees, (I, ll. 4-5)

ぶどうの実をわら葺き屋根の軒端を廻るぶどうの蔓に。
田舎屋の苔むす木々にりんごをならせ枝もたわわに撓わせる。

において、the thatch-eves は次行の the moss'd cottage-trees の cottage と結びついて、田舎屋のわら葺き屋根のその軒端を伝っていくぶどうの蔓を連想することができる。run (round) によってぶどうの蔓が、そして次行の To bend with apples の bend においても、3行の load の余韻を受けて、枝もたわわに撓わせている状態が視覚的に重々しく表わされている。the moss'd cottage-trees のゆっくりとした重い動きがそうさせるのであって、メイヘッド氏も

The clear articulation of the language, especially 'moss'd cottage-trees' (the moss-grown apple-trees in a cottage garden), imposes a slow, heavy movement upon the reader. The heavy 'feel' of the words in the mouth is a physical analogy to the weight of apples richly to the weight of apples richly loading the trees so that they bend beneath the strain.⁹⁾

はっきりと言葉を有節発音することによって特に 'moss'd cottage-trees' (農家の庭の苔の生えたりんごの木々) が、読者にゆっくりとした重い動きを与える。口の中での言葉の重い「感

じ」が、りんごの木に豊かになっているりんごの実の重さと同じ物理的な重さを与え、枝もたわわに撓わせているのである。

<spondee によるリズムの変化と [っ] 音の響きあいとの結合¹⁰⁾>によってもそうなるろう。

And fill all fruit with ripeness to the core; (I, l. 6)

ありとあらゆる果実をば芯まですっかり熟れさせる

の all fruit は (collectively に) 前の行の apples を受け、庭の木々になっているどのりんごまでも芯まで熟れさせ、更には他の木の実にまでも及んでいく連想を与える。to the core と実の内側に向って熟れさせていく反面、ひょうたんやはしばみの実を内に甘い果肉をもたせることによって、外側に向って swell (脹らま) し plump (太ら) させる。

To swell the gourd, and plump the hazel shells
With a sweet kernel; to set budding more,
And still more, later flowers for the bees,
Until they think warm days will never cease,
For Summer has o'er-brimm'd their clammy cells. (I, ll. 7-11)

ひょうたんをふっくら脹らませ、はしばみの実も丸々と
甘い仁で太らせる。更にもっと蓄をつけて、
そしてまた更にもっとつけ遅咲き花に蜜蜂達の為に、
終には蜜蜂達は暖かい日々は終らないだろうと思う、
何故なら夏は粘つく密の巣房をなみなみと溢れさせたから。

a sweet kernal の甘さを受けて蜜蜂達の為に秋の花を咲かせて喜ばせようとする。庭の花に更に蓄をつけてやって、いつまでも暖かい日々が終らないように太陽と図る。warm days will never cease と言いながら、いつかは warm days が終ることを暗示している。秋の日の warm の感じは Reynolds 宛への1819年9月21日付の手紙の中に出てきており、秋の日の重要な感じを与えている¹¹⁾。11行の For summer has o'er-brimmed their clammy cells について、蜜はすっかり巣房に一杯貯えられていた状態を示し、豊さがその最高に達している状態を示している。これから咲く花に蜂は喜んでまだまだ蜜を集めようが、とにかく豊満の極みに達していると言ってい

る。

この第一スタンザを読んで秋の豊穡が暖かい陽差しを受けて、最高の成熟に到達しようとしている感じを得ることができる。霧に包まれている状態の内に醸し出されている円熟は、キーツの詩作の態度そのものを示しており、静謐の内に浮び出てきた想像力の結晶のようにも思われる。

II

第II連においては視線が収穫物、貯えの中に移っていく。

Who hath not seen thee oft amid thy store ?

Sometimes whoever seeks abroad may find

Thee sitting careless on a granary floor, (II, ll. 1-3)

お前を見ぬ者誰いよう しばしばお前の貯えに。

時々戸外に捜しに行く者は誰でもそこに見つけ出す

お前は穀物倉の床の上にのんびりと坐っている、

例によってキーツの前提が最初の含みのある言葉によって出され、それを実証していくのを見ていくことになる。thee といって、それがどんなものを秋の貯えの内に見い出しに行くことになる。abroad は out of one's house or abode; out in the open air (OED) として、戸外に、開けた所に捜しに行ってみることになる。「時々誰でも」sometimes whoever という言葉によって読者を誘い、田園に行ってみることになる。

Thee sitting careless の careless は In a careless manner, without attention, art or study, without care (OED), 又は care-free, light-heartedly (齊藤勇：キーツ詩選の注)¹²⁾により、何の心配もなく、何の気使いもなく安心してのんびりとしている状態を表わしている。つまり on a granary floor の granary (穀物倉) によって受ける印象が秋の収穫物を貯えておくイメージを受けることで、メイヘッド氏は、

The function of 'careless' is to imply that the task of gathering in the harvest has been done and the storehouse has been filled. There is no more work to do.¹³⁾

'careless' の働きは収穫における取り入れの仕事も終って、穀物倉も一杯になっているこ

とを示し、もはやする仕事もない。

と言っている。ここにおいて personification をどうとるかが第Ⅱ連の重要な鍵となっていて、

この第2スタンザは四つの情景から成っているが、ここにある秋の personification はいわゆる「擬人化」とは異なっていて、秋の姿を求めて戸外に出た散策者が歩みをとどめて「秋」をその「貯え」のうちに発見する——秋の情景のひとつひとつのなかにそれぞれ点景人物としての「秋」を見出すという仕組みになっている¹⁴⁾。

と小川教授は述べている。〈秋の情景のうちに「秋」が人間の姿勢をとって登場¹⁵⁾〉することであると、thou はそれぞれの内に秋の姿、秋の情景として現われていると見る。

Thee sitting careless on a granary floor,
Thy hair soft-lifted by the winnowing wind; (II, II, 3-4)

お前は穀物倉の床の上にのんびりと坐っている、
お前の髪は柔らかに籾殻を吹き分ける風に靡いている。

the winnowing wind は普通農夫が吹いてくる風に籾殻と一緒に脱穀物を、手に持って上から落して籾殻を吹き分けるその秋の風のことを言っているのもであって、あえて唐箕^{とうみ}で吹く風とか箕でおおる風とかを言っているのではない。籾殻を吹き分けるようなあの秋の風が吹いていて、その風に髪を靡かせて秋の精が穀倉に坐っている。そののんびりとした情景こそ秋なのだと思うのである。アイアン・ジャック氏はこのイメージは古代イタリアの農業の神 Ceres (ケレス) を暗示しているように思えるとし、例として Giulio Romano の絵 'Sala di Psiche' (Psyche asleep among the Grain)¹⁶⁾「穀物の中で眠るサイキ」を挙げている。別にこれらの絵がキーツの詩の源泉になったと述べているのでなく、共通な類似点を見出す¹⁷⁾と述べて他の三つの絵も挙げている。

Or on a half-reap'd furrow sound asleep,
Drows'd with the fume of poppies, while thy hook
Spares the next swath and all its twined flowers: (II, II, 6-8)

或いは半ば刈られた畝の上にぐっすり眠っている、

けしの香りにまどろんで、お前の鎌が
次の畝とそこに絡まった花々を刈らずにいる間を。

における光景は、秋の陽差しの暖かさと、取り入れに疲れてか休んでいる reaper の状態を思わせる。furrow は the cornfield (OED) で半ば刈られた麦畑で、そこにけしの花の香りで眠気を催したようにもの憂く、うとうとと眠っている状態の秋があると言っている。一瞬停滞した static, stillness な状態なので、inactive なイメージである。all its twined flowers は例えば Mathew Arnold (1822-1888) が 1852-3年頃になって書いた ‘The Scholar-Gipsy’ の一節、

Screend is this nook o’er the high, half-reaped field,
And here till sun-down, shepherd! will I be.
Through the thick corn the scarlet poppies peep,
And round green roots and yellowing stalks I see
Pale pink convolvulus in tendrils creep; (The Scholar-Gipsy, ll. 21-25)¹⁸⁾

小高い半ば刈られた野面^{もせ}の上の片隅で
羊飼よ、私は陽の沈む迄ここに居よう。
茂った麦畑からは真赤なけしがのぞいていて、
緑の根の回りや黄色い茎の回りに
薄いピンクのヒルガオの花がくるくると巻きついているのが見える。

と言っているように、真赤なけしの花が麦に混っていたり、薄いピンクのヒルガオの花が巻きついているのを指しているのであろう。swath は growing grass or corn ready for mowing or reaping (OED) で、thy hook によって、つまり収穫者の手によって、そして鎌によるイメージが、時の鎌を象徴し、まもなく刈られてしまうだろうことになる。最後の実りも、そしてそこに絡まった花も刈られてしまう、その最後の収穫の姿こそ秋の姿があると言っている。

And sometimes like a gleaner thou dost keep
Steady thy laden head across a brook; (II, ll. 8-9)

そして時々落ち穂拾いの人ごとく お前は
荷を載す頭をば、しっかり保たせ小川を渡る

ではメイヘッド氏は、

Autumn now figures as a gleaner, that is to say, a person who picks up the bits and pieces left behind in the reaped field when the crop has been carted away. He is visualized stepping across a small stream, his head loaded with his gathering.¹⁹⁾

秋は今や落ち穂拾いの姿として、つまり、既に作物が運ばれていってしまった時、刈られた畑に残っているいくらかの落ち穂を拾い集める人として表わしている。彼は集めたものを頭にのせて、小川を飛んで渡るのが視覚化されている。

続けて

As F. R. Leavis has shown in his book *Revaluation*, Keats employs verse-structure here to enact the very movement of the gleaner. In the pause after 'keep', and the subsequent picking up of the sense with 'Steady', we have the prudent hesitation of the man carefully balancing his load before he crosses. And the step itself is enacted by the verbal step the reader makes when he moves from the last word of one line to the first word of the other, with the consciousness that the sense has been momentarily interrupted.²⁰⁾

F. R. リーヴィスが *Revaluation* の中で示しているように、キーツはここで詩文構成の上で落ち穂拾いの動きそのものまでを可能にしている。'keep' の後の休止において、そして 'steady' のもつ意味を次にとることによって、小川を渡る前に荷のバランスを注意深くとって、一瞬賢明にもためらう気持を持つ。そしてその飛び越えること自身が動詞の次の行への飛び越しによって、行の最後の言葉から一瞬感覚が中断するのを覚えながら、次の最初の言葉へと動く時に、読む人にもそれを可能にしてくれる。

ここにおいて run-on line (句またがり) の効果を巧みに使って、川を渡る姿を視覚化させている²¹⁾。落ち穂拾いの人のようにしっかりと頭に荷を載せていて、ひょいと川を渡る。アイアン・ジャック氏によると、頭に籠を載せた少女の姿は画家達のお気に入りの主題で、キーツもことに褒めていた。特にプーサンの絵が好きだったようで、それは 'Autumn or the Grapes of the Promised Land'²²⁾をあげ、その荷を運んでいる少女は Canaphoroe (頭に籠を載せた少女) からきているとしている。こうしたイメージが秋を象徴するものとして浮んできたことであろう。

Or by a cyder-press, with patient look,
Thou watchest the last oozings hours by hours. (II, ll. 10-11)

或いはりんご絞りの臼のそば、忍耐強い面持で
お前はじっと見つめている 幾時間ともなく滲み出る最後の最後の雫をば。

cyder-press の光景も典型的な秋のイギリスの光景であつたらしい²³⁾。last oozings のゆっく
りとした汁のしたたりが、終りを暗示させながら、また一雫たれる様子を示し、秋の終りをじっ
と見つめて静かに見守っている気持がこめられている感じがし、with patient look にそれが現
われているようだ。一雫一雫がまたその貯えとして加えられ、秋の store の状態として示され
ている。

III

第三連の

Where are the songs of Spring? Ay, where are they?
Think not of them, thou hast thy music too, — (III, ll. 1-2)

いづくにありや春の歌、ああ、いまいずこ。
思うまじ春の歌、秋には秋の調べあり。

と謡いあげる調子は、呼びかけの内に詠嘆調となり²⁴⁾、自らの疑問の内に、春や夏と比較してみ
れば、秋にも秋の歌声が聞えてくるのではないかと気がついて、秋の調べに耳を傾けることにな
る。秋の持つ二面性、豊穡と衰滅との共存²⁵⁾を暗示しながら、四季の内の秋のもつ特性をみごと
に示し謡いあげている。Where are the songs of Spring? はかつて聴いた春の歌はどうしたの
だろうかと回想しようとする、が Think not of them によって徒らに過去の歌を捜し求めるよ
りも、現在の歌を捜した方がいいのではないかと決断する。音韻的に<不協和音を出してショック
を与え秋と対決する姿勢をとっている>²⁶⁾ともとれる。ダッシュによってその調べに耳を傾けよ
うと一瞬時を置く。キーツの前提がまた出され、秋の持つ二面性を追求していくことになる。

While barred clouds bloom the soft-dying day,

And touch the stubble-plains with rosy hue; (III, ll. 3-4)

縞の雲が静かに暮れゆく日を華やかにする、
そして刈株畑もばら色にそまる時、

barred clouds は横縞の雲で、日本では筋雲とかうろこ雲が秋の特徴として表わされている。bloom は To give a bloom to, to colour with a soft warm tint or glow (OED) として「花を咲かせる」とか「柔らかな暖かい色合いや輝きで彩り染める」という意味で、春のイメージを表わし、the soft dying day と対比している。同じように rosy hue も五月のバラ色を示しながら stubble-plains の刈られた畑と対比している。暮れていく最後の日を華やかにし、刈株の残っている畑をばら色に染める。

Then in a wailful choir the small gnats mourn
Among the river sallows, borne aloft
Or sinking as the light wind lives or dies; (III, ll. 5-7)

その時物悲しげに聖歌隊をなして蚊柱が嘆き泣いて
川端の柳の木の間を高く運ばれては
また低く沈んだりしている、軽く吹いてくる風が吹いたり止んだりするたびに。

a wailful choir は mourn と結びついて、羽虫が群をなして蚊柱のようになって舞っているがまるで聖歌隊が晩歌を歌っているように嘆き悲しんでいるように見える。ブーンという羽音が mourn から聴えるようだし、wailful の長く響く悲しみの声も聴える。また羽虫が命の短さと秋も終るのも嘆き悲しんでいるようにもとれる²⁸⁾。the river sallow も willow として、Taken as a symbol of grief for unrequited love or the loss of a mate (OED) の意をもっていて、悲しみの象徴として表われている。small と light に含まれた小さいもの、軽いもののはかなさも感じられるし、borne aloft と sinking と lives or dies による登りつめていく成長の時と下ってくる時の衰滅と死とを暗示している。

And full-grown lambs loud bleat from hilly bourn;
Hedge-cricket sing; and now with treble soft
The red-breast whistles from a garden-croft;
And gathering swallows twitter in the skies. (III, ll. 8-11)

すっかり大きくなった仔羊は丘辺の方で高い声で啼いている。

垣根のこおろぎは歌を歌い、今また柔らかい高い声で

駒鳥が庭の畑から口笛を吹くように歌っている。

空には燕が群れ集って囀っている。

full-grown lambs のうちに春の仔羊というイメージと full-grown の成長しきった羊とが the dual associations となっているし、また Hedge-crickets にも summer と winter の連想がある²⁹⁾。また red-breast は冬に渡ってくる鳥として挙げられている²⁹⁾。そして swallow も渡り鳥として冬を前にして秋には南へ帰っていく。どちらの鳥も秋の終りを示していて夏が去り冬がくる。この三連において音の響きをもつ語を挙げてみると, wailful, mourn, loud bleat, crickets sing, whistle, twitter といった響きが密集して聴えてくる。韻律的にも更に微妙なニュアンスを出している³⁰⁾。秋には秋の調べがあるのだとして、秋の過ぎるのを惜しむのではなくて、十分秋の特性を知ろうとした。そこには自ずと秋の持つ二面性、豊穡と衰滅があり、それは秋の時の流れの含むものとして、静かに観照することにあつた。

註

- 1) Hyder Edward Rollins: *The Letters of John Keats 1814-1821 Vol. 2.* (Harvard U.P., 1976) p. 193.
How beautiful the season is now—How fine the air. A temperate sharpness about it. Really, without joking, chaste weather—Dian skies—I never lik'd stubble fields so much as now—Aye better than the chilly green of the spring. Somehow a stubble plain looks warm—in the same way that some pictures look warm—this struck me so much in my Sunday's walk that I composed upon it.
- 2) Ian Jack: *Keats and the Mirrors of Arts*, (Oxford, 1967)
- 3) 小川和夫：キーツのオード鑑賞と分析，(大修館書店，1980)
- 4) 訳詩にあたり，小川和夫：キーツのオード鑑賞と分析，を主に，高橋雄四郎：キーツ研究（北星堂，S. 52），出口保夫：キーツ全集2（白風社，1974），上島建吉：English Romantic Poetry（研究社小英文学叢書，S. 42），齊藤勇：Keats' Poems（研究社小英文学叢書，1980），III, ll. 1-2 は奥井潔教授等から適訳語を使用させて頂いた。
- 5) Robin Mayhead: *John Keats*, (Cambridge, 1967) p. 97
- 6) 小川和夫：op. cit., p. 255
- 7) ed. H. W. Garrod: *Keats Poetical Works*, (Oxford, 1972) p. 423, 松浦暢：キーツ—その夢と現実—，(吾妻書房，S. 54) p. 46, pp. 103-104 参照，加納秀夫：英国ロマン派の詩と想像力，(大修館書店，1978)，p. 142 参照
- 8) Robin Mayhead: op. cit., pp. 97-98
- 9) Ibid., p. 98
- 10) 小川和夫：op. cit., p. 256
- 11) warm については小川和夫教授が詳しく説かれている。op. cit., pp. 261-265
- 12) 齊藤勇：キーツ詩選（研究社小英文学叢書，1980），p. 126

- 13) R. Mayhead: op. cit., p. 99
- 14) 小川和夫: op. cit., p. 291
- 15) ibid. p. 291
- 16) Ian Jack: op. cit., p. 236, 高橋雄四郎: キーツの研究—自我の変容と理想主義, (北星堂書店, S. 52) p. 355
- 17) Ian Jack: op. cit., p. 239
- 18) ed. Kenneth Allott, second ed. Miriam Allott: *The Poems of Mathew Arnold*. (Longman, 1979) p. 358-9
- 19) R. Mayhead: op. cit., pp. 99-100
- 20) Ibid., p. 100 又 ed. Miriam Allott: op. cit., p. 652
- 21) 小川和夫: op. cit., pp. 291-2 にも詳説されている。
- 22) Ian Jack: op. cit., p. 237
- 23) Ibid. p. 238
- 24) 小川和夫: op. cite. p. 268
- 25) Ibid. p. 276
- 26) Ibid. pp. 267-270 で詳説しておられる。
- 27) ed. Miriam Allott: *Keats The Complete Poems*, (Longman, 1970), p. 653
- 28) Ibid. p. 654
- 29) OED. <1894, Newton Dict. Birds 771, Even those Redbreasts which stay in Britain during the winter are subject to a migratory movement. 又 1550. Corowley Epigr. 863, When the short days begyn to be colde, robinredbrest will come home to ye.>
- 30) (1)音組成とリズムの関係, (2)その音とリズムのこの詩の「意味」に対する関係, については小川和夫教授が「キーツのオード鑑賞と分析」で詳説されている。